

ボニー・ヒューレット. 『アフリカの森の女たち—文化・進化・発達の人類学』
服部志帆・大石高典・戸田美佳子訳, 春風社, 2020年, 420 p.

田中文菜*

本書は, *Listen, Here Is a Story: Ethnographic Life Narratives from Aka and Ngandu Women of the Congo Basin* [Hewlett 2013] の翻訳である. 著者のボニー・ヒューレットは, 中央アフリカ共和国, コンゴ共和国, ガボン, エチオピアで, 主に思春期の子どもの発達について調査を行ってきた. 中央アフリカ共和国の森でフィールドワークを行っていた著者に, 大人の女性たちが「私の話も聞いて」と言ってきたことが, この本を書くきっかけになったという. 本書は, ピグミー系狩猟採集民アカと農耕民ンガンドゥそれぞれの高齢期 (70 歳頃) と壮年期 (40 歳頃) の女性 4 名のライフヒストリーが収録されている. 彼女たちの語りを交えながら, 著者は, 文化・進化・発達などの切り口から, 個人の生活世界や文化の諸相を読み解こうとしている. また, 生活史理論, スキーマ理論, 愛着理論, 包括適応度と血縁淘汰の理論など, 上記の切り口にかかわる幅広い理論が参照されており, 中部アフリカの民族誌になじみのない研究者であっても, これらの理論を通して自分の研究との接点を見出すのではないと思われる.

本書は 7 つの章から成る. 「はじめに一岐

路に立つ女性の生活」では, 著者のフィールド経験, 本書を書くことになった経緯, 調査の方法, 調査対象者の概要が書かれている. 「第 1 章 森と村の世界」では, 調査地の社会経済的背景と歴史的背景, そこに住む狩猟採集民アカと農耕民ンガンドゥの概要と両者の関係が述べられ, それらに関する女性たちの語りが書かれている. 「第 2 章 森と村の子どもたち」では, アカとンガンドゥの子ども期の生活の特徴が述べられ, 女性たちの幼い頃の記憶についての語りが書かれている. 「第 3 章 良き人生の諸構成要素」では, 思春期から成人期前期についての語り書かれ, 文化, 生態学, 生物学の観点から, 女性になることが考察されている. 「第 4 章 結婚と母親期—厳しくも喜びのある現実」では, 子どもを産むことと喪うこと, それに伴う愛することと悼むことの語りから, 悲嘆の感覚の多様性と共通性が考察されている. 「第 5 章 女性であることの帰結」では, 家庭内暴力や離婚についての語り書かれ, それらと, ジェンダー, 階層や平等主義, 行為主体性, グローバリゼーションとの関係が考察されている. 「第 6 章 世代間の繋がり」と祖母たち」では, 政治的, 経済的な影響, 加齢やジェンダー, 生涯を通じた家族関係について, 高齢期の女性たちと彼女らを取り巻く人々による語り書かれている. 「第 7 章 結論—グローバリゼーションと変化の力」では, 急速に変化する生態環境, 社会文化的状況, 地域的および国家的な力, グローバリゼーションといった変化とそれらへの対応が女性たちの語りにみられることが述べられている. そして, レジ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

リエンスのある女性たちは激動の時代の変化への適応力を持ち、社会の価値観や文化的信念が存在できる場所を作り出しつつ、文化の伝統を維持することが可能であると締めくくっている。

日本語版の本書では、著者に許可を得て訳注や学術用語の解説を付け加えることにより、多岐にわたる本書の内容を理解するための工夫がなされており、英語版以上に女性たちの語りの背景や含意を考えさせるものになっている。さらに、中部アフリカで長年フィールドワークを行ってきた研究者たちによるコラムと、著者と専門分野の近い高田明と竹ノ下祐二による解説が、より一層本書を魅力的なものにしている。

本書の特徴は、「ナラティブ・インタビュー」という手法を用いていることである。自伝的なナラティブを通して、アカとンガンドゥの女性たちの人生経験、そして、彼女らがどのように世界を捉えているかがみえてくる。女性たちの愛や喜び、悲嘆、死への向き合い方、悲しみを乗り越えて前を向く強さなど、心の深い部分がみえ隠れし、うかがい知ることができる。評者は、カメルーンの熱帯雨林に住むバカの子育ての調査をしている。バカとアカはいずれもピグミーという総称で知られており、ピグミーのなかでも互いに近縁な集団である。評者が初めてフィールド調査に入った日の朝、バカの新生児が出産時に亡くなった。その母親は、高い声で遠い村に住む自分の母親に呼びかけ、泣き叫んでいた。そのときは子どもを失ったことを悲しむ様子を傍らで見ることしかできなかつたが、本書のよう

に、話を聞いてと言ったその人の回想に耳を傾けることで、我が子の死に対する心の葛藤、次の出産に対する迷いなど繊細な部分が見えてくると思った。

また、狩猟採集民アカと農耕民ンガンドゥのナラティブの対比から、人や物事や環境の認識の仕方や振る舞い方の特徴が浮き彫りにされている。「アカの基盤スキーマには、異なる年齢と性別間の平等主義、シェアリングという価値観、社会的役割の流動性、個人の自立の尊重、他者への信頼が含まれる。ンガンドゥの基盤スキーマには、はっきり区別される性役割、年齢と性別による階層、両親・年上の兄弟姉妹などの年配の個人に対する服従と尊敬、クランやリネージを同じくする特別な他者に対する義務、物質的なやりとりが土台となった社会関係、呪術への強い信仰、そして他者への一般的な不信感が含まれる [Hewlett, B. L. and Hewlett, B. S. 2008; Woodburn 1982]」(p. 107) たえば、アカの女性は、「男と女の仕事はあまり変わらないよ。もし女が疲れていたら、男は木を探して火を起し、水を手に入れて、料理をするだろう」(p. 130) と語っている。アカは、状況におうじて各人が柔軟に行動し、役割の流動性がみられる。バカも、家事、生業、育児において役割の流動性がみられ、集団として連携し、協力していた。アカの女性は、「分かち合うのは食べ物だけでなく多くのものよ。子どもたちの世話もまた同じ」(p. 320) と語っている。シェアリングという価値観が、食べ物や料理のシェアだけでなく、子どもたちの世話や作業のシェアなどを

含む、幅広いものでもあることがうかがえる。これまで多くの研究者が、ピグミーの子育てに注目し、行動観察のデータに基づいて、ピグミーでは「共同育児」が活発に行なわれることが特徴だと論じてきた [Tronick *et al.* 1987; Hewlett 1991]。本書のようなナラティブの分析により、そうした共同育児がどのような社会システムにおいて、どのような価値観のもとで行なわれているのかが、具体的にみえてくるのではないだろうか。アカの女性は「私が出産しても、ココテ（夫）の母親はくたびれすぎて助けてくれないわ。最年長の娘エラカは結婚して、夫のキャンプに行ってしまった。私と一緒にいて、手助けして、食べ物をくれて子どもの世話をするのはココテ。他には誰もいないわ。キャンプにいる私の友達はその時が来たら助けてくれるだろうけど、彼女たちも自分たちの子どもの世話がある」（p. 218）と語っている。友だちは助けてくれるが、いつもではない。ひとくちに共同育児といっても、そのなかにはさまざまな人間関係があることを、このような語りを通してうかがい知ることができる。量的研究では取り扱うことが困難な文脈を、ナラティブを通して把握することにより、個人の生活世界や文化の諸相をより深く理解することができるだろう。

しかし、ナラティブが実際に現実に起こったことと完全に一致していることはなく、語り手と聞き手が再構成したものであるという点は、前提として踏まえておく必要がある。たとえば、パートナー関係や家庭内暴力などについては、相手側の認識は異なってい

るかもしれない。今回は女性の語りであったが、男性の語りが増えることにより、人間関係や出来事の文脈をより多面的に理解できるのではないだろうか。また、今回の女性のライフヒストリーでは、幼少時代、結婚、夫婦関係、出産などがクローズアップされているが、出産後どのように子どもを育てあげたかについては、具体的な話が少なかった。彼女たちの共同育児という子育て環境や子育て観ゆえに、語りが少なかったのだろうか。それとも、インタビューの仕方や本の編集方針などの理由によるものだろうか。

本書には、女性であり母親であり人類学者である著者のライフヒストリーも掲載されている。著者がフィールドに入る際の経験もくわしく書かれており、これからフィールドワークをはじめめる人に参考になるだろう。そして、現地の人々と著者の関わり方がみえてくる丁寧なフィールドワークの記述は、スキルの伝達が難しいナラティブ・インタビューのひとつの手本として貴重だといえる。

引用文献

- Hewlett, B. L. 2013. *Listen, Here Is a Story: Ethnographic Life Narratives from Aka and Ngandu Women of the Congo Basin*. New York: Oxford University Press.
- Hewlett, B. S. 1991. *Intimate Fathers: The Nature and Context of Aka Pygmy Paternal Infant Care*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Hewlett, B. L. and B. S. Hewlett. 2008. A Biocultural Approach to Sex, Love, and Intimacy in Central African Foragers and Farmers. In W. R. Jankowiak ed., *Intimacies:*

- Love and Sex Across Cultures*. New York: Columbia University Press, pp. 37-64.
- Tronick, E. Z., G. A. Morelli and S. Winn. 1987. Multiple Caretaking of Efe (Pygmy) Infants, *American Anthropologist* 89(1): 96-106.
- Woodburn, J. 1982. Egalitarian Societies, *Man* (N. S.) 17(3): 431-451.